

放射線災害・医科学研究拠点

ニュース レター

2017
Vol.3

contents

第2回放射線災害・医科学研究拠点 カンファランス報告……………	1
資料展示「爆心地から生きる」及び講演会 「原爆を生き抜いた78人の足跡」(広島大学) ……………	4
第2回日独シンポジウム(長崎大学) ……	7
放射線災害への準備と対応 ～EUのSHAMISENプロジェクトを通して～ (福島県立医科大学) ……………	14
平成30年度放射線災害・医科学研究拠点 共同研究課題公募要項……………	18



資料展示「爆心地から生きる」及び講演会「原爆を生き抜いた78人の足跡」

広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部 助教 久保田 明 子

放射線災害・医科学研究拠点に多大なご理解を賜り共催していただいた、2017年夏開催の資料展示「爆心地から生きる」および講演会「原爆を生き抜いた78人の足跡」は、両方とも好評を博して終了した。以下、これらについて報告する。

1. 資料展示「爆心地から生きる」

1-1. 展示企画の経緯

2017年3月、広島大学原爆放射線医科学研究所（以下、原医研）では、所長も務められた鎌田七男広島大学名誉教授より貴重な研究資料をお預かりすることとなった。資料は近距離被爆者（爆心地より500m内で被爆された方）の医療に関するものを中心としているが、それは鎌田名誉教授の長きにわたる被爆者に関する医学研究の中の一部であり、かつ、原医研初期の大変重要な活動に関連するものであった。この資料に関する整備や研究は端緒についたばかりであるが、これを契機として、原医研所蔵資料と合わせて、1960年代以降から行われた原医研のプロジェクトと鎌田名誉教授の足跡をたどる展示を企画した。それが、資料展示「爆心地から生きる：近距離被爆者の医療をたどって」である。展示内容は、パネルおよび文書資料の展示のほか、関連映像の放映、また夏季限定の体験型展示として「顕微鏡をのぞいて染色体と骨髄を見る」を実施した。

1-2. 内容の概要

1960年代後半、NHK 広島での放送したキューメンタリー番組をきっかけに広島市民による爆心地の復元を試みる運動が盛り上がっていったが、それ

と連動して原爆放射能医学研究所（1961年設立、現在の原医研の前身組織）でも、所長の志水清氏と、湯崎稔氏の所属する疫学・社会医学部門（当時）が中心となって社会医学的な調査である「爆心復元調査」が本格的に始動した。「学界の常識からすれば、賭けともみえるものであった」と後年志水氏はその難しさを述べているが（志水清編『原爆爆心地』1969）、原爆の実相解明のための総合的な調査を強く望み、また「体験の継承とは市民の立場で全事実を再構築することだ」と強い信念を持っていた湯崎氏らの尽力もあり、1968年にはNHKと原医研の共同で「被爆地図復元の論理と原爆被災総合調査の構想」が発表され、多くの広島市民の協力を得てプロジェクトが遂行された。爆心地半径500m以内の基本調査は1970年ごろにはほぼ完了するが、この調査の中で得た情報やデータなどをもとに原医研では医学研究プロジェクトも発展していくこととなる。そして1971年には原医研内で正式に「近距離被爆者の総合医学調査」が実施されることが決まった（教授会承認は1972年1月）。

このプロジェクトはその後30年余り継続されたが、これに当初より参加し、プロジェクトが終了するまで研究に邁進してこられたのが鎌田名誉教授であった。この研究の第一報は1973年に報告されたが、この当初から鎌田名誉教授は研究にずっと関与し続け、中心人物となっていた。なお、2016年、その集大成として鎌田名誉教授が第29報「大線量被爆生存者78名の被爆後70年までの追跡調査結果」と題して第57回原子爆弾後障害研究会で報告をした。そのとき、既に故人



であった湯崎稔氏との連名で報告を出されたことは氏の研究姿勢と気概の象徴であろう。

原医研のこのプロジェクトは2000年の鎌田名誉教授の定年退職に伴いいったん終了した。しかし、被爆者に終わりはない。そして、鎌田名誉教授はプロジェクト終了後も近距離被爆者と連絡を取り続け、支え続けた。78名と確認された近距離被爆者も現在ご存命の方は9名と聞く。鎌田名誉教授は、今も彼らに寄り添う。

1-3. 展示と関連行事

会期は2017年8月4日から同年10月19日とし、広島大学医学部医学資料館の2階に展示室を設けることとした。会期スタートの前日である8月3日には鎌田名誉教授をお招きして、オープニングセレモニーを行った。セレモニーでは資料の受領式と鎌田名誉教授によるミニ講演会（広島大学広仁会館）、資料展示の内覧会を実施した。これには、78名のうちのご存命のお一人とそのご家族、また78名のうちの別のお一人のご遺族がご参加くださった。ご存命の方は久しぶりの鎌田名誉教授との再会を喜んでくださり、自身の体験を含めて多くの思いを語ってくださった。もう一人の近距離被爆者の方（既に亡くなられている女性）のご遺族（甥にあたる方）は、偶然ガラスケースに展示していた自分の「おば」の手紙を、字を見てすぐそれとわかったとおっしゃった。また、彼は鎌田名誉教授との面会も果たした。意義のあるセレモニーであった。

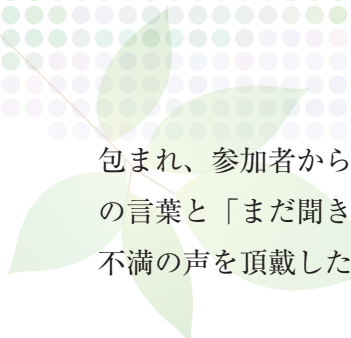


2. 講演会「原爆を生き抜いた78人の足跡」

資料展示準備の調査のなかで、多くの方から、鎌田名誉教授の話をじっくり聞いてみたい、という要望を聞いた。そこで、資料展示では補いきれない鎌田名誉教授の話を拝聴する機会として、講演会を企画した。それが2017年9月2日午後に行った「原爆を生き抜いた78人の足跡」である。場所は、多くの方が参加されやすいようにと、広島平和記念資料館とした。

鎌田名誉教授のわかりやすく親しみやすい話は150名あまりの聴衆の心をつかんだようで大変に好評であり、「次回はいつやるのか」と尋ねられるほどであった。また、会には前述の湯崎稔氏のご子息の皆様もご臨席くださった。会場は熱気に





包まれ、参加者からは「よかった」というお褒めの言葉と「まだ聞き足りない」というありがたい不満の声を頂戴した。

3. 反響など

資料展示についてはプレスリリースを出し、学長会見でも取り上げていただいたおかげで多くのマスコミから問い合わせをいただいた。展示開始やオープニングセレモニーの際は新聞（全国紙・地方紙）や地元のテレビ局に取り上げていただいた。

また、併せて、2017年7月に『中国新聞』では西本雅実記者による鎌田名誉教授の連載がされ（「生きて」15回）、2017年7月31日には、鎌田七男名誉教授の足跡に注目し、原医研所蔵資料にも関心を持ってくださって制作されたテレビ番組「テレメンタリー 2017 爆心地を語る～78人の証言テープ」（広島ホームテレビ、ディレクター：池田宗平氏）が放映された。これらは資料展示と連動した企画ではなかったが、ちょうど時期が重なったこともあって、この連載やテレビ番組を見て展示に関心を向けてくださった方も多かったと推測する。なお、広島ホームテレビの番組は、2017年の第55回ギャラクシー賞上期テレビ部門奨励賞を受賞した。

結果、展示については、1,000名を超える多くの方々が足を運んでくださった。

4. 今後の課題

以上、全体的には好評のなかで実施ができたが、それは鎌田名誉教授を始め、ご協力をいただいた関係各所の皆様の力によるところが多かった。以下、反省を含め、留意点、今後の課題を簡単に述べる。

大きな反省としては、準備期間が非常に短かったことと担当の力量不足のため、展示内容（調査や分析、展示方法などについて）が不十分であっ

た点である。これは展示の開催が原医研に資料が届いてから日があまりなかったことも大きい。ただ、お預かりした資料と原医研所蔵資料そのものの迫力があったことで、その不足の多くの部分が解消された。また今回は広島大学医学部の大きなご理解とご配慮があって医学資料館の一室をお借りすることができたが、日常的にこういった貴重な資料の展示を実施する環境がないことも、展示計画を難しくしている要素の一つでもある。

学術研究を如何に社会に「見せる」か、つまり、科学（医学）研究の社会へのアウトリーチは昨今重要視されつつあり、例えば日本学術振興会の助成金事業「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」では「医学史の現代的意義—感染症対策の歴史化と医学史研究の社会との対話の構築（代表：鈴木晃仁慶應義塾大学教授）」が遂行中であるが、そこでは「社会との対話」、つまり医学（医学史）のアウトリーチが重要な課題となっている。

振り返って、筆者自身も、今後は一層こういった問題意識を持って、広島大学、原医研の研究アウトリーチについて検討し、そのために所蔵資料の整備や環境改善を少しずつでも進めていき、研究機関の社会貢献の一助をなす努力をする次第である。

また、こういった場合、多くの理解と協力を得ることは問題解決の大きな原動力となる。その点、このたび放射線災害・医科学研究拠点にご理解とご協力をいただいたことは大きかった。末尾ながら、心よりの感謝を申し上げる。

追記

本原稿入稿後、鎌田七男名誉教授が2017年12月19日に広島市民賞を受賞されたとの報を得ました。これまでの近距離被爆生存者に関する研究など、一貫して被爆者に寄り添いながら活動が続けてこられた功績が評価されました。